

分に魅力的であった。ただ新しいフレーズの始まりの音が(音量に関係なく)常に曖昧で、その分音楽はよく流れるものの、造型に不明瞭な点を残したのは惜しい。

なお都響はトランペットを舞台上下手に配置しているが、正面を向いたトロンボーンとの音量的バランスに問題を感じさせた。

(後藤 洋)

昭和五十八年度の全日本学生音楽コンクールの入賞者を一堂に集めた協奏曲の夕べを聴く。内藤彰指揮の東京ローゼンクランツ管弦楽団が共演した。(4月21日、中央会館)。

四人の独奏者はいずれも現在中学生。とり上げた作品が難曲揃いなので、正直なところ開演前にはかなりの危惧もあったが、予想に反して四人とも素晴らしい演奏を聴かせてくれた。

ベートーヴェンのピアノ協奏曲第五番「皇帝」を弾いたカイザー・マリは、実に強靱なタッチと明確なリズムで、スケールの大きな造型に成功していた。細部に至るまで全く曖昧さを残さず、強い意志で全曲を統一していたのが印象に残る。

グリーグのピアノ協奏曲を弾いた福田潤子は、柔軟な表現力としなやかで健康的なリズム感が素晴らしい。オーケストラとのアンサンブルも積極的で、最後まで余裕をもって作品を仕上げていた。

この日唯一のヴァイオリンの独奏者、長谷川優美は、メンデルスゾーンの協奏曲を演奏。大きくはないが柔らかく美しい音で、非常に流れのよい音楽をつくっていた。フレーシングの巧みに、この人の豊かな才

能が示されていたように思う。

最後に登場した森田真実がとり上げたのは、ショパンのピアノ協奏曲第一番。若さに似合わず、技術的にも音楽的にも見事に成熟した演奏で、変化に富む楽想を多様な音色と素晴らしい構成力でまともな上げた。彼女たちの将来を大いに期待したい。

オーケストラはやや音が荒く、合奏としての完成度は今ひとつだったが、若い独奏者をもりたてた真摯さは、内藤の手堅い指揮とともに評価されてしかるべきだろう。

(後藤 洋)

ピアノ界

ヴァイオリンのギドン・クレメーメルとともに来日したヴァレリー・アフアナシエフ

はモスクワ音楽院出身のピアニストだが、作曲を手がけたり、パリのエディシオン・デュ・スウィユから小説を出版したりしているユニークな才人。再来日の今回はクレメーメルとの共演のほか、モーツァルトの交響曲長調のコンチェルト(K五九五)を披露した。師だった故エミール・ギレリスの想

い出に捧げるコンサートということだったが、アフアナシエフのしつとりした潤いのある音、細部にまで意をつくしたデリケートなピアノは類のない聴きものだった。第一楽章など、ほの暗い、ゆらめくような表情を映したピアノが、優しく、人間的な温みをもった柔らかな音楽をていねいに奏でてゆく。落ち着きのある演奏で、ピアノを弾くことに対する大きな心の余裕が感じら

れる。一つ一つの音がそれぞれに細やかな、時に細やかすぎるほどの、ニュアンスを宿しており、アンダンテ楽章も深みのある弱音がとりわけ美しかった。テンポはいずれも遅めで、終楽章もまたアレグロにしては随分遅かったが、そのテンポのなかでスロームーション映画でも観るように濃密な表情がクローズアップされる。この現代の詩的感性が紡ぐ弱音の芸術は、最後まで声を荒げることもない親密なモーツァルト像を描き出していた。協演の東フィルは、広上淳一の現代っ児的な血の気の多い指揮とあ

いまって、アフアナシエフのピアノとは対照的に即物的な響きをたてていた。(3月29日、人見記念講堂)

のピアニスト、ウイエステフ、ビエンスは、ショパンとシマノフスキの作品を集めて弾いた。ショパンはお国ものにしてはひどくお粗末な演奏で、スケルツォ第二番などこの見事に構成された作品が、部分的な強調によってすっかり解体してしまい、音楽がまるで流れない。音もささくれだつて美しさに欠けた。ノクテュルヌは、まるでムード・ミュージックみたい俗っぽい歌い方で処理される。ともかく音楽に品格がないのだ。「英雄ポロネーズ」のようなポーランドのピアニストにとつてスタンダード・ナンバーともいふべきレパートリーで、音楽上の、また技術上の破綻が露呈してしまふのはどうしたことだろう。それほど技巧の劣る人ではないのに、それにひきかえ

貸しホール
MINI PERFORMANCE SPACE

友だちがみんな観客になった。
あなたのパフォーマンス映かせます。小さな表現空間です。



年中無休、防音完備
電話予約
東京(03)
545-5613

ピアノ: スタインウェイS型
10:00AM~5:00PM

兔小舎
東京都中央区築地三丁目14-4